

令和4(2022)年度 病害虫発生予報 第4号

令和4(2022)年7月22日
栃木県農業環境指導センター

高温期の病害虫発生に注意しましょう。

予想期間7月下旬～8月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 水稲 いもち病

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや多い(平年比146%：ほ場率、平年比265%：株率)。(+)
・ 向こう1か月の気温は高く、降水量は少ない、日照時間は多い見込み。(一)
- (3) 対 策 ・ ほ場の発生状況を良く観察し、発病が見られた場合、早急にブラシフロアブル(F:16.1、U14)等の予防・治療効果のある薬剤を散布する。
- (4) 備 考 ・ [BLASTAM\(いもち病発生時期予測システム\)](#)の情報、[いもち病 QoI 剤感受性検定結果](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

2 水稲 紋枯病

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並(平年比140%：ほ場率、平年比121%：株率)。(±)
・ 向こう1か月の気温は高く、降水量は少ない、日照時間は多い見込み。(±～+)
- (3) 対 策 ・ 発生が見られた場合には、穂ばらみ期から出穂期までの間にモンガリット粒剤(F:3)、モンカットフロアブル(F:7)等を散布する。発生が激しい場合は2回目を散布する。

3 水稲 斑点米カメムシ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 雑草地におけるすくい取り調査での発生量は6月下旬はやや少ない～平年並(平年比55%：成幼虫数)、7月中旬は平年並～やや多い(平年比131%：成幼虫数)。(±～+)
- (3) 対 策 ・ 穂ぞろい期に斑点米カメムシ類が水田内で見られる場合は、乳熟初期(出穂期7～10日後)までにMR.ジョーカーEW(I:3(A))、エクシードフロアブル(I:4C)等を散布する。
・ 防除後も斑点米カメムシ類が見られる場合は、7～10日間隔で追加散布する。
- (4) 備 考 ・ [植物防疫ニュース\(速報No. 6\)](#)を当センターHPに掲載中。

4 大豆 吸実性カメムシ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・ 7月第2半旬までのフェロモントラップへのホソヘリカメムシ誘殺数はやや少ない。(一)
・ 向こう1か月の気温は高く、降水量は少ない、日照時間は多い見込み。(+)
- (3) 対 策 ・ 開花期の15日後から子実肥大後期(9月下旬)までにトレボン乳剤(I:3(A))、スミチオン乳剤(I:1(B))等を10～14日間隔で散布する。カメムシ類の発生が多い場合は、追加散布する。

5 いちご 炭疽病

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**やや少ない**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並。(±)
・ 向こう1か月の気温は高く、降水量は少ない、日照時間は多い見込み。(一～±)
- (3) 対 策 ・ 雨よけ栽培を基本とし、点滴チューブを用いるなど、できるだけ水の跳ね返りのない方法でかん水を行う。
・ 本ぼへの持ち込みを防ぐため、育苗での防除を徹底する。予防を主体に、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
・ 発病株や感染が疑われる株は早急に取り除き、ほ場外で適切に処分する。
・ 発病株周辺の株は、発病が認められなくても潜在感染している可能性があるため、注意する。
- (4) 備 考 ・ [炭疽病薬剤感受性検定結果](#)、[いちご情報第2号\(炭疽病\)](#)を当センターHPに掲載中。

6 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並(平年比96%：ほ場率、平年比125%：株率)。(±)
・ 向こう1か月の平均気温は高い見込み。(+)
- (3) 対 策 ・ 本ぼへの持ち込みを防ぐため、育苗段階での防除を徹底する。

- ・ 抵抗性の発達を抑制するため、気門封鎖剤を活用するとともに、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。

(4) 備考 ・ [ハダニ類薬剤感受性検定結果](#)を当センターHP に掲載中。

7 りんご 斑点落葉病

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **やや多い**
- (2) 根拠 ・ 現在の発生量が多い（平年比 507%：ほ場率、平年比 300%：葉率）。（+）
 ・ 向こう 1 か月の気温は高く、降水量は少ない、日照時間は多い見込み。（±）
- (3) 対策 ・ 定期的に予防散布を行い、耐性菌発生防止のため RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
 ・ 発生が確認されたらナリア WDG（F:11、F:7）、パレード 15 フロアブル（F:7）等を散布する。
- (4) 備考 ・ [植物防疫ニュース\(速報 No. 8\)](#)を当センターHP に掲載中。

8 果樹 果樹カメムシ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量： **多い**
- (2) 根拠 ・ 現在のフェロモントラップへの誘殺数はやや多い。（+）
 ・ 向こう 1 か月の気温は高く、降水量は少ない、日照時間は多い見込み。（+）
- (3) 対策 ・ こまめにほ場を観察し、飛来が確認されたら防除する。
 ・ 4mm 目合以下の多目的防災網を隙間なく展張し、破損が生じれば速やかに補修する。
- (4) 備考 ・ 山林に隣接したほ場や、過去に被害が大きかったほ場では特に注意する。
 ・ [令和 4 \(2022\) 年度植物防疫ニュース\(速報 No. 5\)](#)、[\(速報 No. 7\)](#) を当センターHP に掲載中。

9 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現況	発生予想	作物名	病害虫名	現況	発生予想
水稲	縞葉枯病	やや少	やや少	トマト	うどんこ病	やや少	やや少
	稲こうじ病	平年並	やや少	さく	白さび病	少	少
なし	黒星病	やや少	やや少	野菜類	アザミウマ類	平年並	やや多
	ハダニ類	多	多		ハスモンヨトウ	やや少	平年並
	シンクイムシ類	やや多	多		オオタバコガ	やや多	多

○ほ場内外の除草は害虫防除の基本です！

- ・ 水田周辺の雑草だけでなく、水田内の雑草（ノビエ、イヌホタルイ等）も斑点米カメムシ類の誘引・発生源となります。また、野菜類や花き類でも、ほ場内外の雑草はハダニ類やアザミウマ類、アブラムシ類の温床となります。適切な雑草対策で、害虫類が生育しにくい環境を作りましょう。

○さくら・うめ・もも・すもも クビアカツヤカミキリ（特定外来生物）

- ・ クビアカツヤカミキリが樹木に寄生すると、幹や枝から、明るい色でうどん状のフラス（幼虫が排出する、木くずと糞が混じったもの）が大量に排出されます。さくら、うめ、もも、すもも等の樹木からフラスが出ているのを見つけたら、農業環境指導センターまで御連絡ください。
- ・ [注意喚起チラシ](#)及び[令和 4 \(2022\) 年度植物防疫ニュース No. 2](#)を当センターHP に掲載中です。

○かんしょ サツマイモ基腐病

- ・ 本病は栃木県内での発生は確認されていませんが、令和 4 (2022) 年 7 月現在、全国 27 都道県で発生が確認されています。発病すると、地上部の変色及び枯死、イモの腐敗等の症状が現れます。
- ・ 健全な種苗の導入及び発病株の早期発見により被害の拡大を未然に防止することが重要です。
- ・ [サツマイモ基腐病に注意！](#)を当センターHP に掲載中です。

○外来害虫 トマトキバガについて

- ・ 南米原産の外来害虫 トマトキバガは、令和 4 (2022) 年 7 月現在、全国 8 県で発生が確認されています。やや桃色がかった乳白色～緑白色のイモムシ状幼虫が、トマトやナス等の葉や果実を食害します。食害を受けると、葉は薄皮だけが残って白～褐変し、果実は小さな穴が空きやがて腐敗します。
- ・ 栃木県内では発生が確認されていませんが、発生が疑われる場合はお近くの農業振興事務所又は当センターまで御連絡ください。「[トマトキバガに注意！](#)」を当センターHP に掲載中です。

農薬は適正に使用しましょう

- 農薬を適正に管理し、容器のラベルをよく読み、農薬による事故等の発生を防止しましょう。
- 6 月～8 月は「栃木県農薬危害防止運動」の実施期間です。

1か月気象予報（予報期間7月23日から8月22日 7月21日気象庁発表）

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。降水量は少ない確率40%、日照時間は多い確率40%です。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）

項目	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	20%	30%	50%
降水量	40%	30%	30%
日照時間	30%	30%	40%

詳しくは農業環境指導センター（Tel 028-626-3086）までお問合せください。

病虫害情報発表のお知らせはツイッター「[栃木県農政部 \(@tochigi_nousei\)](https://twitter.com/tochigi_nousei)」、農業環境指導

センターホームページ（<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>）でもご覧になれます。

